The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	An empirical classification of social anxiety : Performance, interpersonal and offensive
Author(s)	徳山, まどか
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43740
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【75】

氏　　名	徳　山　まどか
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学　位　記　番　号	第　16872　号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科生体統合医学専攻
学　位　論　文　名	An empirical classification of social anxiety: Performance, interpersonal and offensive （社会不安の実証的分類：遂行不安、対人不安、加害恐怖）
論文審査委員	（主査） 教　授　武田　雅俊 （副査） 教　授　杉田　義郎　　教　授　井上　洋一

論文内容の要旨

【目的】

1980年にDSM-Ⅲに登場した社会恐怖social phobiaは、その改訂版において全般型generalized typeを特定せよとの定義が追加された。その結果、全般型に核当しない患者は非全般型（限局型）として一塊されてしまうことになった。しかし、このような症状の汎化の程度による分類では区別し難い患者が存在する。DSM-Ⅳのsourcebookでは、恐れる社会状況の程度（quantity）だけでなく、社会状況の内容（quality）も加味した分類として、performance type、limited interactional type、generalized typeという3つの亜型が提唱されている。

今回我々は、症状特徴から社会不安の分類を試みた。その際、以下の点を考慮した。日本には対人恐怖症と社会恐怖という別個の文化圏で独自に作られた疾病概念が混在する。両者とも人前での羞恥や困惑を恐れる心性で共通しており、社会不安を中核症状とするが、概念が完全にオーバーラップしていないため、いずれか一方の診断基準を用いて社会不安を訴える患者を研究しようとすると、問題が生じてしまう。すなわち、重症対人恐怖の特徴である加害恐怖をもつ者はDSMを診断基準として用いると身体表現性障害（身体醜形障害）や妄想性障害（身体型）に分類されてしまう。あるいは対人恐怖と診断されない社会恐怖も存在する。そこで、我々は対象者をDSMの社会恐怖に核当する患者と定義せず、社会不安を主訴とする患者とした。

【方法】

分裂病性障害、大うつ病、分裂病型人格障害を除いた社会不安を主訴にもつ87名の外来患者と48名の健常対照者に以下の項目を評価する自記式質問紙への回答を依頼した。ⅰ）社会不安の症状（42項目）；ⅱ）日常の人付き合い、会議や宴席などの特定状況、人ごみ、の各状況で表出してしまう身体症状（20項目）と最も苦手とする状況（4項目）；ⅲ）背景（性別、家族歴、学歴、婚姻状況、就労状況、等）（10項目）；ⅳ）仕事、社会生活／娯楽活動への支障の程度（2項目）。ⅰ）の症状に関する回答を基に、因子分析（Varimax回転）、クラスター分析（Ward Method）を行い、患者群を分類した。ⅱ）、ⅲ）、ⅳ）について、ANOVAとχ^2検定を用いて、求められた患者群の群間比較を行った。

【成績】

因子分析から対人的自己不全感 socially inadequate feelings、遂行不安 performance anxiety、加害恐怖傾向 offensive fear、強力性 tenacity の 4 因子が抽出された。これらの各因子得点を類似性の指標にして行ったクラスター分析から、Ⅰ）遂行不安型 performance anxiety type（n=21）、Ⅱ）加害恐怖型 offensive type（n=37）、Ⅲ）対人不安型 interpersonal anxiety type（n=19）、Ⅳ）軽症型 mild type（n=10）の 4 群に分類された。

遂行不安型は、平均発症年齢が24.8才と最も高かった。会議や宴席などの特定状況で症状が賦活されやすく、相手が年長者である対人状況を苦手としていた。結婚・就労状況は、軽症型に次いで良適応を示し、社会生活や仕事への支障の程度も低かった。総じて、遂行不安に悩む者は社会適応が良いと思われた。

加害恐怖型は平均発症年齢が17.9才と最も低く、症状表出状況は全般化していた。相手が同年代、異性、半知りの人である状況を苦手としていた。不登校経験者は40%に上り、社会人では半数以上が就労していなかった。自覚的にも社会生活・仕事への支障の程度が高く、最も重症あるいは進行した型であると考えられた。

対人不安型は、日常の人付き合い場面で症状が出やすく、異性、半知りの人を苦手としていた。思春期時代に親友や友人がいたと回答した者が少なく、95%が未婚者であった。

軽症型では全ての因子得点が低く、社会適応は良好で、仕事への支障の程度も最も低く、軽症であった。

【総括】

クラスター分析を用いて、社会不安障害を症候学的に分類した結果、遂行不安型、加害恐怖型、対人不安型、軽症型の 4 群が得られ、各亜型群の比較から、以下のことが示された。

1）加害恐怖型は最も重症で、症状表出状況は全般化しており、対人緊張は相手が同年代である場合に強くなった。

2）対人不安型は日常の人付き合い場面における恐怖を特徴としていた。

3）加害恐怖型と対人不安型は遂行不安型に比べて、病前適応が悪かった。

このように、社会不安障害には DSM の社会恐怖では明確に定義されていない加害恐怖傾向をもつ亜型が存在することが示唆され、症状特性による分類の方がより実際的で、臨床的にも有用であると思われた。

論文審査の結果の要旨

本申請者は、本研究により、症状特徴から社会不安障害の亜型分類を行った。自記式質問紙の回答を基に、因子分析、クラスター分析を施行した結果、遂行不安型、対人不安型、加害恐怖型、軽症型の 4 群が求められた。各亜型群の比較から、加害恐怖型は症状表出状況が全般化した重症型であること、対人不安型は日常の人付き合い場面における恐怖を特徴とすること、加害恐怖型と対人不安型は遂行不安型に比べて、病前適応が悪いことを明らかにした。

本研究は、DSM の社会恐怖では明確に定義されていない加害恐怖傾向をもつ亜型の存在を示唆するとともに、今後の発展性に期待できるものがあり、精神医学における国際的な実証的比較研究への貢献度が高い研究であるといえる。したがって、学位授与に充分値するものと考えられる。